

①新興・途上国のマクロ経済モデル分析

②アジア途上国の経済開発、中国の台頭と日本のODA

いの みつ ひろ

国際関係学科

飯野 光浩

●連絡先

TEL: 054-264-5382 FAX: 054-264-5382

キーワード

マクロ経済学, 開発経済学, 国際経済学,
新興・途上国, アジア経済



①新興・途上国のマクロ経済モデル分析

現在、中国、インドなどのBRICSに代表される新興国が世界経済で存在感を増している。これらの経済は先進国にない特徴をもっている。それは一国経済に占める農業部門の比率の高さである。現在の主流のマクロ経済モデルは基本的に先進国を想定しているので、生産部門として工業（製造業）のみを仮定して分析を進めている。

本研究では、その主流のマクロモデルに農業部門を導入した新興・途上国向けの開発マクロモデルを構築して、金融政策・財政政策のマクロ経済政策やその他の政策などが経済や農業部門、農村都市間労働移動などに及ぼす効果を理論的に研究・分析している。

②アジア途上国の経済開発、中国の台頭と日本のODA

アジア地域というと世界経済の成長エンジンということで注目されがちであるが、もちろんすべてのアジアの国が豊かであるというわけではない。ラオス、カンボジア、ミャンマーなどアジアにはまだ開発途上の国が多い。従来、これらの諸国の経済開発はメコン流域という地域の枠内での開発の観点から論ぜられることが多く、アジア開発銀行（ADB）などの国際機関もその観点から開発を促進している。

しかし、現在の状況を鑑みると、この観点は重要な点を見逃している。それはこのアジア途上国地域における中国の台頭である。ラオス、カンボジア、ミャンマーなどでは中国の多額の経済援助により、その存在感が増加している。日本は経済状況などにより政府開発援助（ODA）を削減しており、その中でいかに効率的にアジア途上国地域にODAを配分して、日本の存在感を高めていくかは重要な課題である。この課題を、関係者へのインタビューや資料収集などによる現地調査や各種統計データを用いて実証的に研究している。

エスニック関係と国際労働力移動—東南アジアの事例から—



国際関係学科

いし い ゆ か
石井 由香

● 連絡先

E-Mail : yishii@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

シンガポール, マレーシア, エスニック関係,
外国人労働者, 経済発展, 異文化理解



グローバル化の時代において、異文化をいかに理解するか、また違う考えを持つ人々とのように共存していくのが、大きな課題となっている。東南アジアは文化的多様性に富む地域であり、そのなかでも私はマレーシア、シンガポールにおいて研究を行ってきた。この両国とも、人口比率は異なるが、マレー人、華人、インド人といった宗教、言語など多様な文化的背景を持つ人々の間にいかに良好な関係を築くかという課題に、国の政策において、また人々の日々の実践において、試行錯誤を続けてきた国である。さらに、どちらの国も経済発展に伴い外国人労働者の受入国になっており、外国人労働者と国民との関係も注目されるのである。本研究は、世界への眼を開くと同時に、多様な文化的背景を持つ他者との関わり方を考える契機ともなる内容を持っている。



アピール ポイント

マレーシア、シンガポールの現地のエスニック関係や文化に関する基礎的な情報提供、異文化環境における人間関係構築に伴う問題についての相談等、一定の協力ができる可能性がある。

「食の安全」と国際貿易



いしかわ よしみち
国際関係学科 石川 義道

- 連絡先 TEL : 054-264-5112
- ホームページ <https://researchmap.jp/y.ishikawa?lang=ja>

キーワード

世界貿易機関 (WTO), 国際通商法, 食の安全,
国際食品規格委員会 (CODEX), 国際放射線防護委員会 (ICRP)



2018年度の我が国の食料自給率はカロリーベースで37%である。単純化を恐れずにいえば、我々は普段の食事で約6割を輸入食品から摂取していることになる。ともすれば我々は「国産食品＝安全、輸入食品＝危険」というイメージを抱きがちであるが、実際には食品衛生法で定められる検査・監視を通じて、輸入食品についても国内産品と同様に安全性が確保されている。すなわち食の安全は原産国だけで決まるものではなく、安全な輸入食品もあれば、危険な国産食品も存在するのである。したがって、真の意味で食の安全を実現するためには、消費者が「国産か否か」に加えて、「安全か否か」という観点から食品を購入・摂取するリテラシーを身につけることが重要となる。このような問題意識から、静岡県内産食品と輸入食品のあらたな「共存」のあり方を模索している。



ゼミで見学に訪れた名古屋税関・清水税関支署 (本人撮影)

アピールポイント

輸入食品の安全性を確保するための国際・国内ルールのあり方について解説・調査が可能。

女性活躍促進、男女共同参画、ワーク・ライフ・バランス、家族問題の研究

いぬづか きょうた

国際関係学科

犬塚 協太

●連絡先

TEL : 054-264-5329 FAX : 054-264-5099

キーワード

家族、男女共同参画、ワーク・ライフ・バランス、ダイバーシティ、子育て支援



少子高齢化による労働・消費人口の減少、若年世代の流出とそれに伴う地域の衰退、そして厳しい労働環境に対する働く人々の将来不安など、現代日本の社会・経済システムが抱える根本的な問題状況を踏まえて、これからの企業に不可欠なのは、性別を問わず、優秀な人材を確保し、その定着と活用を図る男女共同参画に立脚したダイバーシティ経営戦略である。子育てや介護と仕事を両立できる環境を整備することは、あらゆる世代の男女が「時間制約」のもとでしか働けないこれからの社会構造のもとで、企業にとって経営上の必須の視点となる。こうした観点を中心に、特に女性の活躍を促進し、企業におけるダイバーシティ、従業員のワーク・ライフ・バランス実現、次世代育成支援を充実させる方策に資する研究を進めている。



アピールポイント

- 女性の活躍促進策のポイントを示し、経営戦略としてのダイバーシティに基づく効果的取組が実現できる。
- ワーク・ライフ・バランス実現のための方策の具体的提示や、その効果的な運用方法を明らかにできる。

近現代の東アジアにおける交通体系の再編



国際言語文化学科

おおの じゅんや

大野 絢也

- 連絡先 TEL : 054-264-5303
E-Mail : jy.ohno1936@u-shizuoka-ken.ac.jp
- ホームページ <https://ir.u-shizuoka-ken.ac.jp/jy.ohno1936/>

キーワード 東洋史、東アジア国際関係史、中国近現代史、日中関係史、現代中国研究、植民地表象、地域社会、交通史、鉄道史



近現代の中国を中心とした、東アジアにおける交通建設や政策の展開過程を検討することによって、交通網の沿線地域に何がもたらされたのか、という問題関心を軸に分析を行ってきました。特に各交通機関のなかでも鉄道に着目し、近代化の進展にともなってどのような影響があったのかということを探究しています。

また、サブテーマとして南満洲鉄道の元社員など外地引揚者に対するインタビューやエゴドキュメントを収集し、記憶史料から見た戦後日本の植民地表象についても研究を進めています。

地域の皆さんにとって、国際化する社会のなかで役立つアジアや中国との交流のサポートや、アジアと地域の歴史的な関係を掘り起こすような活動の展開を目指していきます。



南京西駅のラケット型ループ線から見た南京城郭（2014年3月撮影）

**アピール
ポイント**

交通や鉄道の歴史（日本も含む）に関する解説や講演、取材対応も行っています。

第二言語学習者による動詞の習得と効果的な指導方法

おか むら ひろ む

国際言語文化学科

岡村 明夢

●連絡先

TEL : 054-264-5387

E-Mail : okamura.h@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

第二言語習得, 英語教育, 文法指導

日本語を母語とする英語学習者の動詞の習得について研究しています。習得の過程において、学習者がどのような誤りをするのか、なぜその誤りが起こるのかを明らかにします。第二言語学習者による文法上の誤りには様々な要因が関係しており、習得過程においてどのような要因の影響を受けるのかを調べることで、人間の認知メカニズムの解明につながると考えています。

また、文法の誤りの原因を明らかにすることで、学習者がどのような場面で誤りを起こしやすいのかを英語教員が把握することができ、外国語教育においてその文法をどのように教えることが効果的なのかを考える上での重要な資料ともなります。研究で得られた知見を英語教育に応用し、効果的な文法指導方法を考えていきます。

日本人はいかに生きたか—日本仏教・武士道

国際言語文化学科 ^{き ざわ けい}
木澤 景

●連絡先 TEL: 054-264-5331

キーワード

日本仏教, 武士道, 倫理学, 修行, 天台思想,
浄土思想, 念仏, 覚悟, 敵討

日本仏教や武士道を題材に、かつての日本人が自分の人生をいかなるものと捉えてそれぞれの生を営んだかという倫理学的研究を行っている。とくに、「修行」をキーワードに、修行者が何を目指し、何を己に課して日々を生きたかに注目している。かつての日本人の人間観や世界観をふまえ、今日に生きる我々との違いや通底する要素を浮かび上がらせる事により、現代人の生についても普段意識されない方面から光をあてることを目指している。研究テキストは、地獄・極楽の記述で有名な源信（942-1017）の『往生要集』や、「武士道と云は死ぬ事と見付けたり」の語がよく知られている山本常朝（1659-1719）口述の『葉隠』などを中心に扱っている。研究テーマは仏教では天台思想、浄土思想（念仏）、武士道では覚悟や敵討の問題などである。



国際刑事裁判を主な題材とした、国際法上の主体とそれらの相互関係の研究

きたの よしあき

国際関係学科 **北野 嘉章**

- 連絡先 TEL : 054-264-5328 FAX : 054-264-5328
E-Mail : y-kitano@u-shizuoka-ken.ac.jp
- ホームページ <https://researchmap.jp/y-kitano/>

キーワード

国際刑事裁判, 国際連合, 国際刑事裁判所,
国際人権法, 武力紛争法, 国際刑事法, 国際組織法



国際刑事裁判は、第2次世界大戦後のニュルンベルク裁判や東京裁判のような古い事例も存在しますが、冷戦終了後の1990年代以降に国際人権法や武力紛争法の遵守を確保する手段、また国連安保理が平和を維持・回復するために用いる方法として注目されるようになり、2002年に常設の国際刑事裁判所（ICC）が設立されました。これまで私は、国際刑事裁判に関する制度や事例を主な題材として、国家や国連やICCといった国際法上の主体の特徴とそれらの相互関係を研究し、その成果を日本語や英語の論文等で発表してきました。また、現在私は本学で、国連などの国際機関のあり方を規律する国際組織法の教育を主に担当しています。私は今後も、堅実な研究を積み重ねつつそれを活かした教育や社会活動を行い、国際刑事法と呼ばれる比較的新しい法分野の着実な発展や理解の促進に貢献したいと考えています。



オランダのハーグに所在する国際刑事裁判所の建物

("International Criminal Court Headquarters, Netherlands" by Hypergio is licensed under CC BY-SA 4.0)

アピール ポイント

国際刑事裁判や国際人権保障に関する講演等をお引き受けできます。

歴史認識の越境化と公共史の実践



けんもち ひさき
国際言語文化学科 剣持 久木

● 連絡先 TEL : 054-264-5253 FAX : 054-264-5253

キーワード

歴史認識, 公共史, ヨーロッパ, 歴史教科書, 博物館, 東アジア



オバマ大統領の広島訪問によって日米間の歴史認識問題は大きく前進したかもしれないが、東アジアでは歴史認識問題は依然大きな障害になっている。本研究は歴史認識問題の解決のために、地域統合が進むヨーロッパで進行中の「公共史」の実践に注目する。歴史認識問題を公共史の問題と捉え直すならば、国際的な次元と国内的な次元の二つが存在する。本研究は、この二つの次元における公共史の実践を総合的に検討し、歴史研究と社会のニーズとの相関関係という視点で考察する。国際的には、国境を超える歴史教科書、博物館などの状況を、国内的には多様なメディアを通じた歴史研究の成果の啓蒙/受容の関係性を検討する。いわば、歴史認識をめぐるタテ(専門家/一般)とヨコ(国境)に存在してきた境界を超える可能性についての研究である。



下段右の写真 引元: https://www.bundestag.de/webarchiv/textarchiv/2015/kw19_gedenkstunde_wkii_rede_winkler-373858

アピールポイント

日本と近隣諸国の間の歴史認識問題解決のための具体的な提言を行います。

フランス現代政治および欧州外交史、欧州の外交安全保障



国際関係学科

こ く ぼ ち は や
小窪 千早

● 連絡先

TEL：054-264-5335

キーワード フランス、シャルル・ドゴール、ヨーロッパ、
欧州統合、EU（欧州連合）、CSDP（共通安全保障・防衛政策）、
NATO（北大西洋条約機構）、日欧関係



フランスの政治外交史、特にドゴール政権期から現代に至るフランスの外交・安全保障政策についての研究を行うとともに、EUやNATOを中心とするヨーロッパの政治・外交・安全保障政策の研究を行っている。ヨーロッパの統合は外交・安全保障分野にも及んでおり、またとりわけロシアのウクライナ侵攻以降、欧州地域の安全保障は国際秩序の動向そのものにも重要な影響を及ぼしている。また近年では、インド太平洋地域における日本と欧州諸国との安全保障協力も急速に緊密になっている。フランスなど欧州諸国の政治とEUやNATOの動向を分析することにより、ヨーロッパの重層的な理解に努めるとともに、現在の国際政治における日欧協力の可能性についても研究を進めていきたいと考えている。



アピール ポイント

フランスなど欧州諸国の政治やEUおよびNATOの動向など、現在の欧州情勢や国際安全保障に関する分析などで一定の協力ができます。

アフリカ地域研究、グローバリゼーション研究、人類学

こ なか しん や

国際関係学科 湖中 真哉

●連絡先 TEL：054-264-5267 FAX：054-264-5099

キーワード 東アフリカ, ケニア, 牧畜民, 遊牧民, マーサイ, サンプル, 国際開発, 国際協力, 国内避難民, 経済人類学, 生態人類学, 物質文化



1990年以降、東アフリカで長期の臨地調査研究に従事している。研究のおもな対象は、ケニア・タンザニアに居住し、牧畜を主な生業とするマー系の人々(マーサイ、サンプル等)。専門は学際的な総合的地域研究。極度の貧困、国際開発、国際協力、紛争と難民、平和構築、環境と資源、異文化表象とメディア、フード・セキュリティとセーフティ・ネット、緊急人道支援等、グローバリゼーションに関連する諸課題を研究している。

オーラルヒストリーによる韓国知日派知識人に関する研究

こ はり すすむ

国際言語文化学科

小針 進

(本研究内容についてご興味のある方は、地域・産学連携推進室までご連絡ください。)
TEL : 054-264-5124 E-Mail : renkei@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

日韓関係, 韓国社会, オーラルヒストリー,
眺め合い, 朝鮮半島情勢, 対外意識, 韓流, 韓国政治, 知日派

オーラルヒストリー・メソッドを主に用い、韓国社会で影響力を持ってきた知日派の知識人や政治家を対象に体系的な「語り」を得て記録化することを主に行ってきた(写真は、その成果をまとめた刊行物)。現代日韓関係の再証明を行うことが目的である。

オーラルヒストリーの意義のひとつは、既存の文字記録だけでは知りえない話を得られる点である。会話でpushするうちに、話者の記憶の片隅からファクトや思いを引き出す(pull)ことが可能だ。これまで一般には知られていない多くの韓国社会と日韓関係に関する知的な「語り」を得ることができた。政府間の公式発表、メディアによる報道や言説だけではわからないことである。

日韓関係は、「1945年に終戦ー65年に国交樹立」、「親日と反日」・・・といった図式的な構図だけでは理解できない。多元的な人的関係によって構築されてきたことが、知日派知識人の「語り」から見えてくる。



国際海洋法をめぐる諸問題および国際法上の免除に関わる諸問題

さか まき しず か

国際関係学科

坂巻 静佳

●連絡先 E-Mail : sakamaki@u-shizuoka-ken.ac.jp

●ホームページ <https://researchmap.jp/10571028>

キーワード

海洋, 漁業, 海洋環境, 外国国家, 裁判手続, 国際法, 国際海洋法



私の専門は国際法です。なかでも主として、①国際海洋法と②国際法上の免除について研究しています。

①国際海洋法とは海洋に関する国際法です。海洋をめぐる様々な問題について国際海洋法がどのように規律しているのか、またそれはどのような状況をもたらしているのか等について分析したりしています。海洋環境の保護、海洋生物多様性の保全等は、海洋に関わる喫緊の課題です。これらの課題に関わる国際法規則の検討にも取り組んでいます。

②国際法上、国家は他国の国内裁判所の裁判手続から免除される、また国有財産は他国の国内裁判所の判決の執行から免除されるという規則が確立しています。これを国家免除または主権免除といいます。20世紀半ば以降、外国国家等に対し免除を付与する範囲は、徐々に限定されてきました。そこで、現行国際法上、国家はどのような場合に外国国家等に対して免除を付与することを義務づけられるのか等について研究しています。



アピールポイント

国際法に関する調査等が可能です。
国際法に関するレクチャーや講師等をお引き受けできます。

自由・民主主義を追求するアメリカ政治外交

さとう まちこ
国際関係学科 佐藤 真千子

●連絡先 TEL: 054-264-5385
E-Mail: machikos@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

信教の自由, LGBT, 人権, 企業, 制裁, 説明責任
(アカンタビリティ), 表現の自由, プライバシー, アメリカ



建国理念の自由・民主主義を追求するアメリカ合衆国の政治・外交を研究しています。特に諸外国の人権や自由の問題に関する外交政策の形成過程に注目しています。アメリカは人権侵害に関与している個人やその協力者に対して入国禁止、資産凍結などの経済制裁を課しています。またグローバル化した世界の市民・団体が各国の企業の労働環境を注視しています。

あなたの会社、職場、取引相手は大丈夫ですか。日本も例外ではありません。ある日突然、会社の関係者が制裁対象になったり、グローバル化した社会の市民があなたの会社、工場、商品に対して反対運動や不買運動を展開したりするかもしれません。世界があなたの会社をどんな視点で見ているかご存知ですか。いくつかの国際的な指標、制裁、企業への反対運動について実例を紹介しつつ、会社が怠ってはいけない配慮、取り入れるべき取り組みについて情報提供します。



ホワイトハウスや議会の前で特定の国に対するデモを行う人々

アピール ポイント

特に、海外で企業活動を行っている方々、これから進出しようと考えている方々に参考にしていただきたい情報やアドバイスを提供します。

COIL 型教育の実践と効果

国際言語文化学科 さわ さき こういち
澤崎 宏一

●連絡先 TEL: 054-264-5352

キーワード

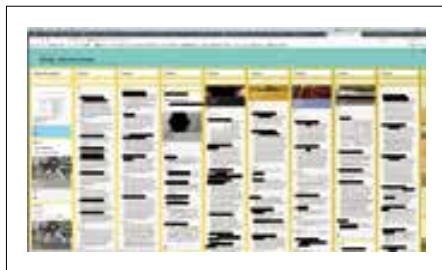
COIL 型授業, 日本語, 第二言語習得



COILとは、Collaborative Online International Learningの略語で、インターネットを活用して離れた2つの（異文化の）教室が共に学び合うための教育方法のことをいいます。これまで、静岡県立大学と米国の大学、そして国内の大学と、Padlet, Flipgrid, Zoom等を用いて学生同士がつながり、授業の一環として協働学習を試みています。

実践一覧：過去の接続先（2019年から）

ノースカロライナ大学シャーロット校（米国）の日本語クラス
オークランド大学（米国）の日本語クラス
ゴンザガ大学（米国）の日本語クラス
三重大大学の留学生クラス など



世界政体／世界文化の理論構築に貢献する グローバル・テスト・ガバナンスの研究

さわ だ たか ひと

国際言語文化学科 **澤田 敬人**

● 連絡先 TEL : 054-264-5254 FAX : 054-264-5254

キーワード 世界政体／世界文化、同型化、政策借用／教育借用、オーストラリア、プリンシパル＝エージェント関係、合理性神話、ハイスティクス性、グローバル・テスト・ガバナンス、多文化主義



OECD の PISA など代表される国際学力調査への参加国が徐々に増えている。その一方で先進国・発展途上国・新興国の別を問わず世界各国は自前の学力調査を実施する政策を精力的に進めている。グローバル化した時代における国際と国内双方のテスト政策を分析する視角として、本研究では国民国家／国民文化と同じ機能を残しつつも国境を越えたより大きな単位として世界政体／世界文化を措定し、なぜ世界各国は同時に国際学力調査と自前の国内学力調査を行う判断に至るのかを明らかにする。このように世界政体／世界文化の中でグローバルに収斂する理論を提示しつつ、世界各国に見られる判断の差異については、国際・国内双方のテスト政策に見られるハイスティクス性に重点を置いて各国事例を積み上げている。ハイスティクスなテストは状況に応じて簡単にローステイクスに移行し、その逆の向きも確認されている。本研究ではとりわけオーストラリアの国内学力調査である NAPLAN によるテスト政策を各国事例の一つとして精査している。



アピール ポイント

本研究で論じている世界政体／世界文化は世界で統一的な価値がもしあるとしたらそれは何なのかを追究しています。人類文化の多様性の研究で道に迷ってしまったかたは、ぜひ本研究をヒントに再出発し目的を遂げてください。

東南アジアのイスラーム



国際言語文化学科
(イスラーム学、地域研究)

しお ざき ゆう き
塩崎 悠輝

- 連絡先 E-Mail: shiozakiyuki@u-shizuoka-ken.ac.jp
- ホームページ <https://db.u-shizuoka-ken.ac.jp/show/i-shiozakiyuki.html>

キーワード イスラーム、イスラーム法学、東南アジア、マレーシア、インドネシア、ファトワー、スーフィズム、ロヒンギャ、ウラマー



東南アジア、特にマレーシアやインドネシアにおけるイスラームについて研究しています。特に、イスラーム法学の分野の研究が中心です。中東やインドとの交流を通して、東南アジアのイスラーム法学が発展してきた歴史が主な研究課題です。東南アジアでイスラームがどのように学ばれているのか、また、東南アジアから中東へイスラームについて学ぶために留学する人々についても研究しています。著書に、『国家と対峙するイスラーム マレーシアにおけるイスラーム法学の展開』（作品社、2016年）などがあります。

東南アジアにおけるイスラームについての研究の一環として、イスラームを理念に掲げた政治運動、ロヒンギャ難民問題、日本に居住する東南アジアのムスリムなどについても研究しています。



図1 東南アジアで学ばれてきたイスラーム法学の古典書



図2 マレーシアのイスラーム学校で学ぶ生徒たち

アピールポイント

東南アジアのイスラーム団体、イスラーム教育機関、政治指導者に精通しています。

地域の文化財「羽衣」の教育・観光への活用 —学生×産官学による地域活性化—



国際言語文化学科 ^{すず き} 鈴木 さやか

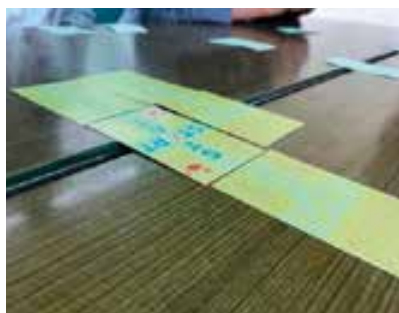
●連絡先 TEL: 054-264-5351 FAX: 054-264-5351

キーワード

能「羽衣」、地域の「物語」の活用、学生による地域貢献、「羽衣」絵本



静岡・三保松原を舞台とする能「羽衣」を、地元の文化・歴史を学ぶための教材として、また地域活性化のための観光資源として役立てるための研究を行っています。2015年には観世会副理事長の山階彌右衛門氏の監修のもと、「羽衣」絵本を製作し、同年に学生約10名と「羽衣つたえ隊」を結成。静岡県下の子どもたちに読み聞かせ活動を行うとともに、様々な外国語版の製作とそれを用いた観光事業を行っています。学生発の企画として、羽衣ゲームや地元の企業とコラボした天女の衣装の制作、「羽衣」や三保を紹介するパンフレットの発行などを行った他、静岡市役所との連携による「羽衣」アニメーションの制作、SPAC(静岡県舞台芸術センター)所属俳優と静岡在住の音楽家による「羽衣」劇の上演など、「羽衣」を軸とした地域活性化事業は様々な広がりを見せています。



羽衣カードゲーム



羽衣絵本

アピールポイント

学生の柔軟な発想、楽しむ力が、本活動のアピールポイントです。「羽衣」を生かした学生たちとのコラボ企画をお待ちしています。

第二言語の知識と習得のメカニズム

す だ こう じ
国際言語文化学科 須田 孝司

● 連絡先 TEL : 054-264-5357

キーワード

第二言語習得, 英語教育



日本人英語学習者の文法能力と即時的な言語理解の過程について研究しています。日本語と英語の文法構造について生成文法理論に基づき分析した上で、日本人が日本語や英語で書かれた文をどのように理解しているのか検証しています。

日本人英語学習者の文理解の過程が解明されれば、日本人が漠然と感じている英語に対する不安(「日本人だから英語ができない」等)を取り除くことができ、日本人の英語に対する学習意欲を向上させることができます。また、人間の言語習得の過程が明らかにすることができれば、言語障害者の言語機能の回復過程の測定・リハビリテーション等にその知見を応用できる可能性があります。



ストレスと健康の心理学

その だ あき ひと
国際言語文化学科 **園田 明人**

●連絡先 E-Mail : sonoda@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

心理的ストレス, 適応, 健康, 学習性無力感, 学習心理学, ポジティブ心理学, ウェルビーイング



ストレスと適応・健康、無気力、抑うつなど、臨床的問題の基礎メカニズムを、心理学の観点から解き明かそうとする、実証的研究を行っています。

基礎メカニズムの中でも、パーソナリティ要因の作用や、環境刺激に対する認知・連合学習のメカニズム、抑うつや動機づけに及ぼす効果などを明らかにする研究などを行っています。

最近では、オプティミズム／ペシミズムやポジティブ・イリュージョンと適応、ウェルビーイングとの関係に関心を持っています。また、産業場面や教育場面の問題、さらには震災ストレスや、中高生のネット依存の問題など、より現実的な問題に寄与する研究も行っていきたいと考えています。

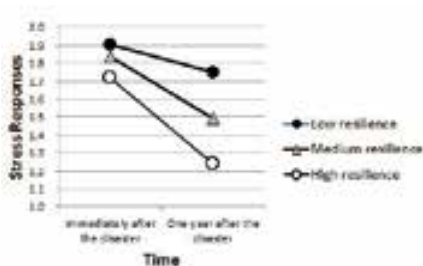


図1 精神的回復力と震災ストレス反応：震災直後は、精神的回復力に関わらずストレス反応が強いが、1年後は、精神的回復力が高い方が、ストレス反応が弱い。

(園田, 2013)

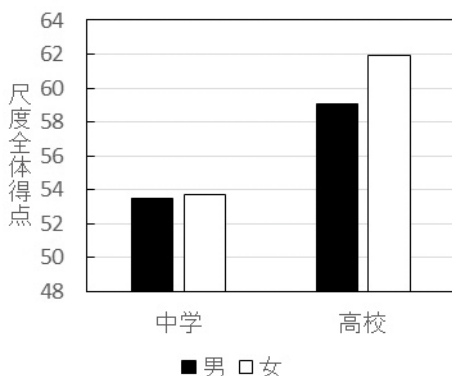


図2 中高生版ネット／スマホ依存傾向測定尺度の開発：高校生は中学生よりも依存尺度の得点が高かった。

(園田, 2019)

アピールポイント

研究スタッフがいないため、共同研究を御希望の方は、お互いに分担して、協力しながら進めることを希望します。

アフリカにおける地域の特性と潜在力を活かした災害対策と開発援助



国際関係学研究科 そん しょうがん
孫 暁剛

●連絡先 TEL：054-264-5322 FAX：054-264-5322

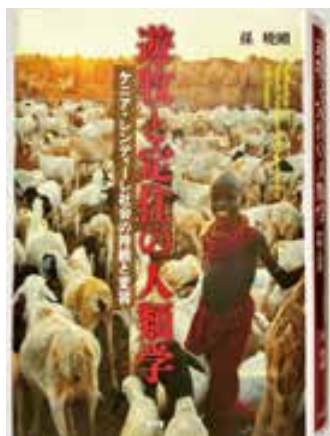
キーワード

アフリカ, 気候変動, 自然災害, 開発援助,
地域の潜在力, 多様性, ケニア, 遊牧民



21世紀はアフリカの世紀と言われています。アフリカの国々は今、政治の安定化、急速な経済成長、そして多様な自然環境と社会・文化を活かして発展を続けています。私は以下のテーマで研究を進めるとともに、アジアとアフリカの理解・交流・協力の促進をめざしています。

- 1) アフリカの乾燥・半乾燥地域に暮らす遊牧民の生業と社会・文化に関する生態人類学的研究
- 2) グローバルな気候変動にともなうアフリカの環境変化と自然災害の増加に対する地域社会の対応と地域間比較
- 3) 地域の潜在力（多様な自然環境と在来知識・技術・伝統的な対応など）と、防災科学や開発援助を融合した総合的な災害対策の構築
- 4) アフリカを中心とした海外学生実習の企画・運営
- 5) アフリカに関する文化理解や国際交流を支援するためのデジタル映像・写真ライブの製作



小さな技術革新が大きな変化をもたらす：長年重い水タンクを背負って運んだ遊牧民の女性たちは、最近このローリング水タンクを導入して生活を劇的に改善した。

アピールポイント

地域社会のニーズを理解し、地域の潜在力を活かし、草の根レベルの支援とSDGsの実現に目指しています。

地域社会の多文化共生

たか はた さち

国際関係学科

高畑 幸

● 連絡先 TEL : 054-264-5323 FAX : 054-264-5323

キーワード

地域社会, 多文化共生, 在日外国人, フィリピン人



地域社会の多文化共生に関する実証的研究。外国人住民の組織化、地域の日本人住民への啓発を含めた総合的な関わりを模索しつつ、各地域の実情にそくした地域づくりを側面的に支援している。



平安時代和文の語彙語法の研究／日本語の歴史／現代日本語

国際言語文化学科 たけ べ あゆ み
竹部 歩美

●連絡先 TEL: 054-264-5341

キーワード

日本語, 源氏物語, 国宝源氏物語絵巻, 日本語史, 現代語, 文法, 敬語, 写本, くずし字



平安時代の言語の有り様を知ろうとすると、『源氏物語』を避けて通ることはできず、これを正しく読解する必要があります。『源氏物語』を正しく読解しようとするとき、平安時代の日本語の文法や語の意味を正しく理解する必要があります。『源氏物語』を正しく現代語訳しようとするとき、現代語を正しく理解する必要があります。

古代語から近代語まで連綿と続く言語変遷の流れにあるものが現代の日本語です。このことを念頭に置きつつ、古代・現代の日本語―特に文法―の研究を行っています。

- ・平安時代の文法、語彙、敬語の研究
- ・『源氏物語』を日本語学的に調査したうえでの精確な逐語訳の追求
- ・国宝『源氏物語絵巻』と源氏物語写本の日本語学的研究
- ・現代語の文法を学校文法に基づいて歴史的観点から解説しようとする試み
- ・現代日本語の敬語の調査と研究

アピールポイント

- ・源氏物語を読む講座や源氏物語写本（くずし字で書かれたもの）の読解講座の講師を県内で毎年担当しています。
- ・改まった場面での日本語の運用（例：敬語の使い方・メールの書き方）の指導に取り組んでいます。

日英語の語法・文法の認知言語学的研究/言語コミュニケーションにおける対人配慮

た む ら と し ひ ろ
国際言語文化学科 田村 敏広

● 連絡先 E-Mail : tamuratoshi@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

言語学, 認知言語学, 言葉の意味分析, 英語教育, 日本語教育, 言語コミュニケーション, 対人配慮, 言語戦略

・認知言語学では、言葉の背後には常に人間が存在し、さまざまな言語表現は私たち人間の物事の捉え方を反映していると考えます。つまり、言葉を分析すると人間の思考や認識の仕方が見えてくるのです。このような観点から文法を見ると、文法は単なる言語事実の規則化ではなく、文法はなぜそのような形をしているのか、その理由が見えてきます。このような視点は、英語教育、日本語教育に大きく役立つと考えています。

・言語コミュニケーションでやりとりされる発話は、必ずしも新情報をやりとりしているわけではありません。むしろ、意味のない発話や、すでに旧情報となった事柄を伝える発話の方が多いのではないのでしょうか。このような発話の目的は、多くの場合、対人配慮です。私たちの言語コミュニケーションは対人配慮に溢れています。対人配慮の観点から見ることで、私たち自身の言語コミュニケーションの仕組みや戦略が見えてきます。



アピールポイント

地域社会のニーズを理解し、地域の潜在力を活かし、草の根レベルの支援と SDGs の実現に目指しています。

外国にルーツをもつ子どもの教育支援に関する研究

つぼ た こう へい

坪田 光平

国際関係学科

● 連絡先

E-Mail: tsubota@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード マイノリティ、教育支援、進路形成、エスノグラフィー、
学校、連携



父母の両方またはどちらか一方が外国籍である場合の子どもの出生数は、1990年代以降徐々に上昇し、近年では新生児全体のおよそ4.2%が外国にルーツをもつ子どもとなっている。これまで外国にルーツをもつ子どもは「日本語を話さない子ども」として理解されてきたが、世代の進行によって日本語を第一言語とする子どもはもちろん、「日本人」としてのアイデンティティを積極的に志向する子どももみられるようになっている。言語的・文化的に日本社会への統合が緩やかにみられるとはいえ、外国にルーツをもつ子ども・若者をとりまく環境は依然として課題が多く、家庭・学校・仕事にわたって不利な立場に置かれている。こうした実態を社会的に解明しながら、誰もが排除されない社会にむけた支援施策の構想や連携のあり方を模索・検討している。

アピール ポイント

呉永鎬・坪田光平編著, 2022年, 『マイノリティ支援の葛藤—分断と抑圧の社会的構造を問う—』明石書店
清水睦美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平, 2021年, 『日本社会の移民第二世代—エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今—』明石書店
額賀美紗子・芝野淳一・三浦綾希子編著, 2019年, 『移民から教育を考える』ナカニシヤ出版